

今回、創作文の最終候補に残った作品は、力が拮抗していたように思います。

物語としての「かたち」が、きちんとできているものが多いことに感心しました。

「記憶食」も、まとまりのいい作品でした。

人の記憶を食料として生きている女の子、芹葉。その芹葉と友だちになった真子の視点に寄り添い、物語は進められていきます。主要登場人物は他に、芹葉の幼馴染みの陵と、真子の幼馴染みの大地。この中学二年生の男女四人の会話は、実にテンポがよかったです。

ただ、文体が軽すぎるきらいがあるのと、また、設定の甘いところも目につきました。「記憶食者」は、最後に消える際、自身が存在していたということに関わるいっさいが、みんなの記憶から消えることになっています。けれど、日記だけは残すことができた……このあたりは、かなり無理な展開といわざるを得ません。写真やテープやビデオのデータはすべて消えてしまうのに、なぜ日記だけは大丈夫なのでしょう。その理由をちゃんと書いておく必要があります。そういった細部をきちんとおさえておくかおかないかで、作品のもつ説得力に大きな差が出てくるのです。細かいところも流してしまわずに、じっくりと考えぬくことが大事だということを、心に留めておいてください。

しかし四人のキャラクターはそれぞれとても魅力的ですし、彼らの友情もわかりやすく描かれていて、読者の共感をよぶ作品に、充分なり得ていると思いました。

「帰り道」は、単親家庭の男の子の、学校から家までの四十分間の心象風景が描かれている作品。小学四年生の「僕」の一人称で、現在の状況、寂しさ、母親への思いなどが、きめ細かに綴られています。「四年生の視点」にしては言葉の選択が大人っぽいのと、現代を描いているはずなのに背景や人物の設定が少々古めかしいことに違和感をおぼえましたが、物語全体に漂うしみじみとした情感が、読み終えたあとも心に残る作品でした。

「涙色のレインコート」は、作品のテーマにこめられた作者の真っ直ぐな気持ちが伝わってきます。なにより読後感がさわやかなのがよく、優秀賞にふさわしい作品でした。

さて冒頭、「きちんとできている作品が多かった」と私は書きましたが、しかしそれと同時に、「どこかで読んだような気がする」「どこかで観たものに似ている」つまり、既視感のある作品が多い、といった印象も受けました。

もちろん、既存の作品に学ぶことは大切です。しかし、自身の作品の発想は、そのなかでおさまることをせずに、もっと自由に羽ばたかせてほしいと思いました。

あまり枠にはまらず、枠からはみ出る、枠から飛び出す……いい意味で、はじめてみましょう。十代である今だからこそ書ける作品、十代のときにしか書けない物語、というものが、きっとあるはずですよ。

応募作品のレベルが高くなってきたように思いましたので、さらなる望みを申しました。きらめく「若さ」を存分に生かした、個性あふれる作品の誕生を楽しみにしています。